
救い

出口 常葉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救い

【Nコード】

N3476F

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

夢に苦しめられる女性に助けを求められた私は、犯人である魔法使いの弟子について語る。しかし、それは……、という話。

壁も床も天井も、全て白色で統一された部屋の中。真ん中に置かれた白い小さな机をはさんで、私と今日の相談者である女性は向かい合って座っていた。

「毎晩、同じ人が夢に出てくるんです」

私の前に座った彼女は、そう言って話を切り出した。

俯き加減で、話し方も声も弱々しい。机の上に乗せられた手も細く、随分やつれている様であった。

彼女の着ている服だけが、部屋の中で唯一鮮やかな色彩を放っていた。私の着ているものはもちろん白だ。

年のせいかな、髪も随分白くなってきた。

「口ひげでも蓄えれば似合う年なんじゃない」

と今朝、愛する妻が出かけに言ってくれた。なるほど考えてみよう。とは言え、今は目の前に座っている人の苦しみを取り除くのが先だ。

私は彼女に話を続けるように促した。

「夢の中で、その人はとても格好良くて。私をいつも助けてくれます」

「それはそれは……。悪い夢ではないのでは？」

私がそう言っていると、彼女は小さく首を振った。

「いいえ、私はいつも危機に陥れられるのです」

「危機に？」

話が穏やかでなくなってきた。

「はい。彼が私を救いにくるまで、私は聞きに常に陥り続けねばならないのです。そうでなければ、彼が私を救うことはできませんから」

なるほど、道理である。

「毎日危機に陥る気分を味わったことはありませんか？命が危険さら

されるといふ恐怖が毎日続いたことはありませんか」

彼女の問いに、私はただ首を横に振るしかなかった。

「しかし、その彼とやらが助けしてくれるのでしょうか？」

「ええ、そうなのですが。彼はいつも本当にぎりぎりのところですか助けてくれないのです」

「例えば？」

「谷底めがけて落ちていき、地面が見えてそれがものすごい勢いで近づいてくる。もうダメだ、と目を閉じたら彼がぎりぎりのところで救ってくれるとか。大きな得体の知れない化け物に狙われて、その生臭い息を感じるほどに追い詰められたところで、やっと間に入ってくるとか」

絶叫マシンのようなものか。

「不安なのです。彼が、彼が助けしてくれなければ、私はこの夢の中で本当に殺されてしまうのではないか。明日の太陽を見ることなど出来ないのではないかと」

彼女は一息でそう言って、それから深く静かに息をついた。

「眠るのが怖いんです。出来ることならば眠りたくないんです」

そう語る彼女の顔は、確かに焦燥感に包まれていた。頬はこけ、目は落ち窪み、肌も随分と荒れている。髪も張りを失いみすばらしくあちこちに跳ねていた。

「しかし、眠らなければあなたは死んでしまう」

「はい。先日、睡眠不足がたたって、とうとう倒れてしまいました。気絶してもダメなのです。私が眠るとあの夢は必ず襲い掛かってくるのです」

彼女はそう言いながら自分で自分の体を抱きしめるようにした。がたがたと、体が震えているようだった。

「それでここに来た」

「はい、もう先生におすがりするより無いのです。私の精神はどうかしてしまった。何とかしてください」

彼女は私にすぎるような視線を向けた。その瞳の奥にともる光は

力を失い、今にも消えそうになっていた。

「あなたがここに來たのは正解でした。確か、紹介を受けたのでしたな」

「はい、斉藤さんという方に」

「ええ、覚えていますよ。あの方も悪夢に悩まされていた」

「はい、ですから私の話を聞いて、斉藤さんは是非にと先生を勧めてくれました」

そうだろう。明らかに彼女は普通ではない。そこらの医者の手に負える状態ではないのだから。

「これから言うことは、少し非常識に聞こえるかもしれませんが、しかし、よく聞いてください。これから言うことは全て真実です」

私の真剣な眼差しを理解してくれたのか、彼女もまた真剣な眼差しで私を見つめながら頷いた。

「あなたの悪夢は、魔法のせいです」

「え」

彼女は信じられない言葉を聞いた、とばかりに顔をしかめた。

「お気持ちは分かります。しかし、事実なのです。魔法のせいであなにはそんな夢ばかり見るのです。そして、魔法をかけたのは夢の中の彼です」

「ど、どうして……」

「それはもちろん、あなたに恋をしているからです。彼はあなたの心を自分に向けさせようとしたのです」

「つ、つまり、あの彼は魔法使い、と？」

「いえ、魔法使いの弟子です」

「で、弟子？」

そう、弟子だ。本物の魔法使いは、人の心なんて簡単に操れる。わざわざ夢を見せる必要なんてないのだ。けど、魔法使いはそんなことしない。彼らにとって、それは何の意味も持たないことなのだ。何しろ、魔法使いとなったものは人間に対する興味を失う。ただ、弟子はまだ人間に興味を持っているから、せつかく覚えた魔法を、

意中の人を振り向かせようなんて事に使うのだ。その代わり、魔法使いは弟子にたいした呪文を教えない。夢を見させる魔法と、箒で空を飛ぶ魔法の二つだけだ。

「昔、この二つの魔法を駆使して大金持ちの娘を虜にした弟子がいました。そしてそのまま娘の貯金で海外に逃亡した。未だ捕まえることは出来ていませんが、噂では幸せな家庭を築いているとか。今の弟子達は、みんなそれを真似るのです」

「そ、それで私はどうすれば」

「どうする必要ありません。どうせ魔法は防げないのですから」

「そんな……」

「ご安心ください。ここに来て正解といったのは、我々ならば対処できるからです」

「と、言いますと？」

彼女は首をかしげた。私は、懷から手帳を一冊取り出した。

「この手帳をご覧ください。ここの金文字のところですよ」

「まほう……魔法取締官……ですか？」

「そうです。私は国の機密機関魔法取締局の者なのです。魔法を悪用したものを速やかに突き止め、逮捕するのが私達魔法取締官の職務なのです」

「は、はあ……」

信じられないのも無理は無い。何しろトップクラスの機密事項なのだ。こんな機関が存在することすら、普通の人間は知らない。我々は太陽の光が当たらない裏の世界で生きるものなのだ。

「この白い部屋は特殊な構造になっていてましてね、あなたにかけられた魔法を分析し、直ちに犯人を割り出せるようになっていいます。今頃は、私の仲間が犯人の下に急行しているはずですよ」

「あ、はい……」

まだ事態を飲み込めていないようで、彼女の口からは生返事だけがこぼれてきた。

「ご安心ください。あなたは今夜からゆっくり眠れますよ」

私の自信たっぷりの言葉に、多少なりとも安心したのだろう。彼女はにこりと笑うとそのまま机の上に突っ伏して安らかな寝息を立て始めたのだった。

「四時二十三分。睡眠に入りました」

白衣の女は時計を見ながら淡々とした口調でそういった。

「ふむ、改善の兆しは無し……か」

女の隣に立つ、やはり白衣の男は難しい表情で呟いた。

目の前にはガラスが一枚あり、その向こうには一人の初老の男が小さな机に突っ伏して寝息を立てていた。向こうからは鏡にしか見えていないはずである。

「今日も鏡に向かってひたすら一人芝居でした。パターンもいつもと一緒です。危機に陥る女性との対話。そして、彼自身は秘密組織の一員。颯爽と彼女を助ける。違うのはシチュエーションだけです」
女は手に持ったノートに書き込みながら淡々と喋る。

「そうだな」

「今日は魔法が登場しました」

「うむ、日々彼の世界は現実から遠ざかっているようだ」

白衣の男はそう言って深々と溜息をついた。

「先生、原因はやはり……」

「うむ、奥さんを助けられなかったことだろうな。目の前で交通事故故に巻き込まれて……むごい最期だったそうだ」

「つまり、その自責の念が、誰かを助けるといふ妄想を生み出している……と？」

先生、と呼ばれた男は痛ましい表情のままで静かに頷いた。

「それで彼は自分の心を救おうとしているのだ」

「救えるのでしょうか？」

「それは分からない。ただ、こうした作業は誰もが無意識にやっているものだ。自分の心を救おうと思えば、人は自分に平気で嘘をつ

く」

「はあ」

よく分らない、という表情で女はノートに男の言葉を書き付けた。

「ともかく、このまま明日も観察を続けよう。データというのは、
と続けることに意味がある」

「はい」

「誰かに言つて、毛布をかけてあげてくれたまえ。風邪でも引か
れと、データが満足に取れないかもしれないからね」

「はい」

男は女が頷くを見て、そのまま部屋を出て行った。女はガラス
の向こうの男を最後に一瞥して、それから部屋を出て行った。部屋
の中には誰もいなくなった。

ガラスの向こうで眠る男の顔は、ただ安らかだった。

（後書き）

まあ何というか、救いの無い話しでした。
おかしいな。

救いのある話を書きたかったのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3476f/>

救い

2010年10月8日15時15分発行